

# 博物館だより



No.142

平成30年9月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行  
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13  
TEL 0930-33-4666  
FAX 0930-33-4667

## ◆博物館NEWS 文化遺産ボランティア 実践編にチャレンジ!!

今年で3期目を迎えた博物館の文化遺産ボランティア養成講座ですが、今回は実践編として「習うより慣れる!」のスタンスで、現場体験の積み重ねを目標としています。  
具体的には、①ガイド(解説&観光案内)、②ガイド(文化遺産の



▲ガイド編の実践(上・右写真)  
7月21日(土)に犀川帆柱地区にある重要文化財・永沼家住宅の除草作業を行いました。  
所有者や地元の保存協力会の皆さんと共に繁茂した夏草を伐ってスッキリ。室内も伸縮箒でクモの巣を除去。これまたスッキリしました。



▲ガイド編の実践(博物館にて)  
7月18日(水)に行橋市からの見学団体の館内ガイドを行いました。見学者にも喜んでもらって好評なスタートが迎えられました。

軽微なお手入れ。清掃・除草など)、③ワーク(館蔵資料の整理やデジタルデータ化)等といった三種の作業にチャレンジしていただいています。  
7月中にひととおりの作業を体験していただきましたが「結構できたね!」「これはてごわい!」など色々な声が聞かれました。みなさんにはこれからも息長く、楽しみながらチャレンジしてもらえたらと願っています。

## ◆講座・教室・催し物ガイド 9月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】  
9月1日(土) 9時30分〜
  - 【古文書講座】  
9月8日(土) 10時〜
  - 【古典かな講座】  
9月15日(土) 9時30分〜
  - 【みやこ学講座】※現地見学会  
9月22日(土) 9時〜
- ※日程等変更となる場合があります。  
※見学会等は別途ご案内します。



## 博物館で「楽習」しませんか?

- 博物館には次のような気軽な学びの場があります。どなたでも、今からでも、お試し参加もOKです。詳しくは博物館へお問合せを!
- ①歴史講座(講座4種/上記参照)  
館や町内外の文化遺産を題材に、町の歴史と文化を学びます。
  - ②文化遺産ボランティア養成講座  
町の宝を自分達の手でガイド&ガイドできるような練習する講座です。
  - ③博物館友の会  
「故郷を楽しく学ぶ」をモットーにバスハイクや歴史探検ウォークなど様々な催しを行っています。

## 6・7月の業務日誌から



▲「博物館のお仕事」の一つ 出土遺物の洗浄作業にトライ



▲松田さんの解説を聞きながら色鮮やかな昆虫の世界に見入る

6月23日(土)、みやこ学講座の現地見学会で旧豊津城下を巡りました。講座のテーマは「ふるさとの明治150年」。みやこ町の近代は豊津から始まったともいえ、域内の旧跡巡りで再発見の一日でした。

7月4・5日(水・木)、犀川中学校から2名の生徒が職場体験学習に訪れました。「博物館はモノを並べた施設」のイメージがあったようですが、地域の宝を未来へ伝えるための様々な仕事があることに驚いた様子でした。よい体験になりましたか?

7月6日(金)、西日本豪雨がみやこ町の文化遺産を襲いました。国分寺跡公園は排水が追付かず一時ため池のようになり、園地北側の法面が小規模に削られるなどしましたが、幸いにも大被害は免れました。

7月22日(日)、博物館夏の企画展「みやこ世界昆虫展」がスタートしました。テーマが昆虫だけに子どもたちに大人気。また、協力者の松田勝弘さんが連日のように解説して下さるのでこちらも大好評です。



▲みやこ町の近代の象徴ともいえる旧豊津藩校育徳館「黒門」



▲豪雨の中の国分寺跡公園苑地 深さが20cmを越えたところも

# みやこの歴史発見伝 110

## よしだますぞう 吉田増蔵(その四)

一「健作」について

これが転機となり、その業績が改めて評価されることになりました。

### 「健作」と「増蔵」

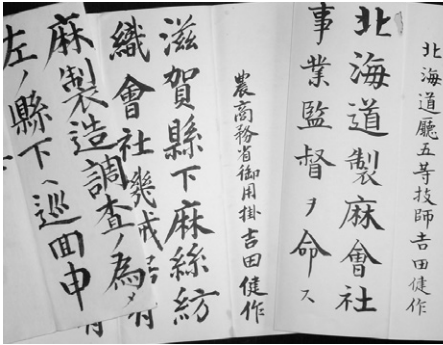
吉田健作は、嘉永五年（一八五二）に京都郡上田村（現みやこ町勝山上田）に温次（父）とイツ（母）とのあいだに生まれましました。温次は、地元の庄屋など要職を勤めた人物で、イツは、仲津郡山鹿村（現みやこ町犀川山鹿）の出身で、その父、山田利兵衛もまた山鹿村で庄屋などを勤めた人物でした。

### 町外で評価された「業績」

現在、みやこ町歴史民俗博物館では小宮豊隆をはじめ、みやこ町出身で様々な分野で大きな業績を残した人物を取り上げ、その業績を広く知っていただく「顕彰」活動を行っています。この中で、唯一兄弟として対象となっているのが、吉田増蔵とその兄健作です。吉田健作についてはこれまで「吉田学軒の兄」という位置付けが先行し、地元でもその業績を深く知る人物が少なく、むしろ彼が赴いた滋賀県、栃木県、北海道などで「地域発展に尽力した恩人」としてその業績が高く評価されているといった状況でした。しかし「勝山町史」編纂に係る調査によって、彼の詳細な資料が故郷の勝山で良好な形で発見され、

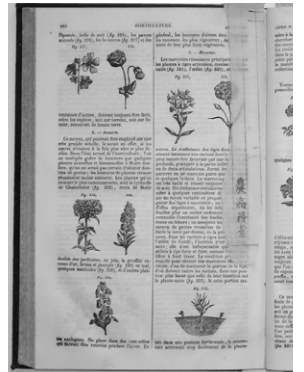


▲吉田健作



▲各種の辞令

になりました。この上京の背景には、先に上京していた「水哉園」の学友であった末松謙澄（現行橋市前田出身・後に内務大臣）が影響したものと推測されています。



▲フランスから持ち帰った文献資料

### フランスにおける麻の研究

吉田健作は、殖産指導の技術者として働く傍ら、産業振興及び国力の充実には、紡績業、特に製麻業の発展が急務であると考へ、日本の気候・風土に適した亜麻の栽培、製麻技術の研究に没頭します。明治九年（一八七六）八月には内務省勧農局内国勧業博覧会事務取扱兼務を命ぜられ、明治十一年（一八七八）フランスで開催された万国博覧会へ、松方正義（仏国博覧会副総裁）に随行してフランスに渡りますが、この時、同じ船には偶然にも末松謙澄も乗船していました。フランスでは各地を巡見しますが、この時、日本との技術的な格差を痛感します。現実を目の当たりにした

### 製麻会社の設立

明治一四年（一八八一）に帰国した健作は、製麻工場建設の意見書・予算書などを農商務省に提出。これを受けて同省は製麻業に関連する調査のため、健作を各地に派遣しました。そして数々の困難や曲折を克服し、献身的な努力の結果、明治十七年（一八八四）六月、滋賀県滋賀郡松本村（現大津市）に日本最初の製麻工場「近江製絲紡織会社」の設立が許可され、同十九年十一月に開業の運びとなりました。その後も健作の指揮によって明治二十三年（一八九〇）四月に下野麻紡織会社（栃木県）、同年七月には北海道製麻会社が開業しました。これらの製麻工場設立により、近代製麻業を中心とした殖産は、日

健作はフランス北部のリール市にあった大規模な亜麻の栽培農家で、昼間は製麻技術の実地研修、夜はフランス語、機械工学などについて、文字通り寝食を忘れて猛勉強しました。その結果、三年という短期間で製麻に関する一連の技術や知識を習得することができました。しかしこの無理がたたなり、またリールは寒冷地であったこともあり健作は重い喘息の持病を抱えることになりました。



▲吉田健作君碑(滋賀県三井寺)

### 兄の顕彰碑と学軒

没後の明治三十年（一八九七）八月四日、日本初の製麻工場が建設された大津市に位置する三井寺に吉田健作の功績を称える石碑が建立されました。碑面には殖産興業の発展に尽力した人物の名と共に、石碑の書を担った「弟」増蔵の名もみることができまます。

十四歳という年齢の隔たりがあり、異なる職務に就いても、自らの身を削って外国の先進的な技術を習得し、国の近代化に努めた兄の姿は、増蔵にとってかけがえのない存在であり、最も尊敬できる人物の一人として慕われていたことが文面から伺うことができます。

【井上信隆】